

社会学評論

JAPANESE SOCIOLOGICAL REVIEW

Vol.72, No.2 / 2021

望月美希 著

**『震災復興と生きがいの社会学
——〈私的な問題〉から捉える地域社会のこれから』**

(御茶の水書房, 2020年, A5判, 267頁, 7,800円+税)

松井 克浩
(新潟大学人文学部教授)

東日本大震災から10年が過ぎ、これまで被災と復興をめぐる多くの著書・論文が公刊されてきた。本書は、「生きがい」という被災者の再生にとってきわめて重要で、かつたやすく論じることが難しいテーマを掲げ、一貫した議論を展開するという特徴をもつ。

著者は「生きがい」を、「その人の生活 (life) に組み込まれてきた活動ないし行為から得る、その人が生きていく上での生存理由」と定義する。それを、①震災と「生きがい」の問題はどのような点で関連するのか、②どのようにして被災者の「生きがい」を地域社会で支えていくのか、という2つの問いのもとで論じている。「生きがい」という個性を有する〈私的な問題〉を、「他者との間に開いていく実践」に照準するまなざしが全編を貫く。

本書の対象地は、津波により大きな被害を受けた宮城県沿岸部の農村地域である。6年近くに及ぶ、農作業の手伝いや活動ボランティアなどの参与観察を含むフィールドワークが方法として選択された。それによって、現場の状況を理解した上で、個々の被災者の心情に分け入る精彩に富んだ記述が可能となっている。

まず冒頭部分で、「人間の復興」をめぐる議論から「生きがい」というテーマを抽出し、本書における位置づけが示される。第2章では、岩沼市玉浦地区でのフィールドワークにもとづいて、震災と復興政策が地域の農業・農業者に与えた影響が論じられる。行政の支援による津波被災地での農業再開は、法人化による集約化という傾向をもった。その一方で、民間支援や自助努力により農業再開に至るケースもある。それは、「『することがない』状況や精神面での辛さを抱えた被災者が、農業の場で働くことで自らの〈生〉のあり方を取り戻そうとする」動きであり、「生きがいとしての農業」とよぶことができる。

続く第3章では、亘理町の「健康農業亘理いちご畑」の事例をもとに、「生きがいとしての農業」への支援と被災者のニーズが検討される。仮設住宅から新たな住

宅への移行期に、被災者は再度の人間関係の喪失に直面していた。「健康農業」で働くことは、活動の場で〈役割〉を見出し、それを通じて他者と関わって、互いの「生きがい」を認め合うような関係性を築くことにつながった。「することがない」という悩みを抱えた被災者にとっては、行為や活動を通じて生きがいを取り戻すことが必要だったのである。

しかし民間団体の支援による活動は、震災復興に関わる助成金の終了とともに継続が困難となり、それを地域社会にどう引き継ぐかが課題となる。第4章では、この段階での「生きがいとしての農業」を支えた「市民組織G団体」の活動が取り上げられる。G団体は外部支援者と住民との対話から生まれ、防潮林の再生や「健康農業」の後を継ぐ「おらほの畑」などの活動に取り組む。その特徴は、「居住地や関心が多様で異質な地区内外の住民を巻き込み、もう一つの共同の基盤を形成しつつある」ところにある。そこでの「地域」は、集落などの圏域に限定されるものではなく、震災後の関係性や復興への想いなどの「主観的な観点」から捉えなおされる。すなわち、他者が抱える〈私的な問題〉に対して、多様な立場の住民が関わり、互いに支え合う、そうした共同的な対応の場として「地域」を見出すことができるのである。

本書の結論とも対応して、評者はとくに次の2点について考えさせられた。第1に、従来は被災者支援において「語ること」が注目されてきたが、「何らかの行為や活動」が必要だという著者の提起は重要である。たとえば新潟県中越地震の被災地でも、仮設住宅に隣接して設けられた「生きがい健康農園」が大きな役割を果たしていた。その一方で、中越地震の際には「語ること」を通じた被災経験の整理が、喪失の回復に寄与したという報告もある。「すること」と「語ること」は、時間的なズレを伴いながら、どこかでつながってくるのかもしれない。

第2に、本書の事例では、双方向的な支え合いの関係のもとで〈私的な問題〉をめぐる共同性が構築された。おそらくその先に出てくる課題の1つは、そうした営みをどうすれば制度的・政策的に支えていけるかということであろう。被災地のそこかしこにあったかもしれない共同性の芽は、どのように育み支えていくことが可能だったのか。現実の復興政策のどこに問題があったのか。本書の事例からも、示唆が得られるように思われた。

本書の最後で「今後の課題」として提示されていた原発事故避難者のケースについては、この間少し関わってきた評者自身、問題の深刻さを前に途方に暮れている。「地域」に依拠して共同性を考えることが難しく、また時間の経過とともにますます「語ること」が困難となっている現実がある。津波被災地の事例を読み解くことで豊かな分析視角を手にした著者が、どのように道を切り開いてゆくのか、その成果に期待したい。